

建築家の檻



連載 2

Grasshouse

2

八時半に目覚まし時計のベルが鳴りだした。今日は丹下会長への第一回目の取材の日だ。

朝の光線がカーテンを透かし、観葉植物のぎざぎざの葉影をカーペットの上に落としている。範子は毛布から裸の片腕を出して静かに眠っている。多少のいさかひがあっても、こういう表情をみていると優しい気持ちになってくる。薄い産毛が朝の光にぼんやりと浮かぶ。

寒い。毛布の中に二人分の体温が籠もり、このまま出たくないような気持ちになる。

範子は現在、すぐそばに流れる野川の反対側のアパートに住んでいた。歩いてほんの数分の距離だ。

昨夜はキノコ入り野菜カレーを作ってくれた。というか、手先が不器用な彼女は、単純にカレーやシチューがいちばん上手なのである。それしかできないといってもよい。細い川を挟んで行ったり来たりで、もう四年になる。

どちらの部屋も狭いので、何とか来年あたりには、一緒に住めるもっと広い部屋に移ろうと思っている。

そのために僕は、えり好みせず何でも仕事を取って働かなければならないのだった。とにかく今の生活の型から、何とか脱却したかった。

(年収の半分のギャラか。――悪くはないな)

窓を開くと、枯れ葉を焼く香ばしい臭いがしていた。

世田谷の外れ、喜多見の住宅街の樹木は、色濃く染まり、葉も落ちていた。銀杏の黄色い葉が、すぐ裏の公園のジャングルジムの周囲を隙間なく埋めている。

歯を磨いていると、範子が起きた。

「もう行くの？ 頭、痛あい。あたしまだお酒、残っているみたい。ワインあんな飲んじやっ
たし。ねえ、昨日買ったトーストでも食べてけば。何だか、体がだるいの」

「いいよ。好きなだけ寝てろよ。今日はどうせ、何も予定ないんだろう」

まるで自分の部屋のように範子は言うと、また、くたりと伏せて、眠ってしまった。

長い栗色の髪の毛のひとつまみが、唇にはさまっている。

渋谷の輸入雑貨の店に勤めているが、夜はときどき新宿の呑み屋でバイトをやっていた。そのせいか、いつも彼女はだるそうにしている。

月に二、三度はひどい酔い方をして帰ってきた。店を辞めろと言うと、二人の経済のことが陰湿な和田ととなり、さらに僕が相談もなくゲーム雑誌の出版社を退職してしまったことを彼女が持ち出して、ついつい激しい口論になってしまう。

昨夜は仲直りの意味も兼ね、安物の甘めのドイツワインで、ささやかに乾杯した。

住宅街の朝は、すでに冬の匂いが漂っていた。

僕はひさしぶりにネクタイをきっちりと締めて、ICレコーダーをバッグに差し込み、欠伸を噛み殺しながら、アパートの冷えた階段を、甲高い音を立てて降りていった。

丈の高い垣根を曲がると、空地に真新しい縄が張られ、地鎮祭をやっていた。

掘り出された黒土の臭いがする。新しいマンションでも建設するのだろうか。不況なのに、みんなよくこんな余裕があるものだと思う。

しかし、この向こう側は東京の中でも、いわゆる成功者たちの住む地域だった。河岸段丘の上の広大な邸宅。庭の中の芝生や竹林。広い車庫にはベンツやBMW。

そして、緑におおわれた崖の下の普通の地域には、平凡な一戸建てや、マンションや、アパートが並ぶ。面白いもので、そこにはちゃんと秘かな棲み分けがあった。

僕みたいに、東京以外で育った余所者の目から見れば、ちょうどいま通りかかっている野川に生息する野鳥や魚や昆虫たちの生態系のようなものだ。

首筋が冷える。野川の細い銀色の流れの上に、小さな驚らしい白い鳥が水面すれすれに低空飛行をし、そのまま橋の下を優美にくぐり抜けてゆく。

狭い河原の砂利の上に、雑草の緑がまばらに連なっている。自転車を走らせトレーナーを着た品のいい初老の男性が、犬を連れて枯草に囲まれた川沿いの遊歩道を過ぎていった。

空気は冷たかったものの、都心は明るく霞んでいた。

久しぶりにサラリーマンに混じって、電車で数十分揺られた。灰色のビルの無数の窓が、列車の進行とともに、朝日に反射していく。

色川さんに渡された下手な地図を片手に、僕は東銀座の地下鉄の駅の階段を上がっていった。地下鉄を出て、銀座から少し離れた通りを幾つか過ぎた。

築地に近い。うっすらと埃をかぶって色褪せたビルが並んでいる。空は淡い青色に霞んでいた。

僕は大学二年の頃、高層ビルを見ると、自分が路上に潰れてしまいそうになるという妙な強迫観念に囚われていた。巨大で圧倒的な存在感を持つビルの底で、人間に過ぎない自分が、何も主張できない惨めな存在だと感じてしまうのだ。その不安感を、勝手に『高層ビル不安神経症』と呼んでいたが、その半年ほどの期間、ビルディングを見上げるたびに、舌の根が乾き、全身がしびれるような嫌悪感に襲われた。

いま考えると、社会への拒絶反応が、軽い神経症を招いていたようにも思う。

工事現場では厚いアスファルトがめくりかえされ、黒いコールタールでしめつけられた新しい層が、秋の澄んだ日射しであぶられていた。

髪の毛を黄色に染めた痩せた若者が、スコップをガチガチと響かせて、土砂を除けている。強い刺激臭がする。

ふと僕は、街路樹の脇で、せかせかと舗道を掃いている集団に気づいた。

彼らはむっつりとした顔つきで、同じ作業服姿に『一社一丸、報恩道』という襷をかけ、ほぼ等間隔に並んで箒を動かしている。

ワイシャツの袖をまくり、鉢巻きを締めている中年男や、エプロンをつけた若いOLがいた。通行人が不思議そうに眺める中を、脇目もふらず紙屑や落葉、風俗営業のチラシなどを掃き集めていた。ボランティアには余裕がない。

――と、いきなり、ピピーッと鋭く笛の音が響いた。

「おい、もっと効率よくやりたまえ。そこ、話してるヒマなんかないはずだゾ。山田、長谷川。あと十分だ。いいなッ」

陽に灼けて精悍な顔つきをしたリーダーらしい壮年の男が、笛を口から離し、私語を交わしている若者たちに、檄を飛ばしている。

彼はワイシャツの袖をまくり上げ、きびきびと動いて、たえずメガネの奥で鋭い眼を光らせている。風貌はといえば、色浅黒くインド人の理論物理学者とでもいうような印象だった。僕が立ち止まって眺めていると、その男は、つかつかと角のところまで行き、腕を休めてしゃがんで二人の若者の前で、箒の柄の先端を垂直に立てて、コツコツと苛立たしげに鳴らした。

陽はしだいに高くなり、信号機の前に並んだ車のボンネットを温めていた。

街路樹の枝を透かして、巨大で威圧的なビルが幾つも、都心部の薄い埃で霞んだ秋の空を背景にして肩を並べている。それを見るだけで『高層ビル不安神経症患者』だった僕は、落ち着かない気分になってしまう。

大量の車が、前になり後ろになりして、黄色い街路樹を背景とした信号の前で、車体を鈍い銀色に耀かせてせめぎ合う。路上脇では、秋の匂いを染み込ませた大きな朽葉が、少しずつ重なっていく。舗道をそのまま歩き、竹林に囲まれた丹下建設の会社のエントランスを確認した。

表通りから一本奥に入ったところに、何やら奇怪な黒灰色のビルが見つかった。ひとこと言え、ふぞろいの倉庫をいくつも積み重ねた貨物船のような建物といった印象である。

前衛的で斬新というべきなのか、異様というべきなのか。

建設会社の本社ビルとはいえ、どこか風景にそぐわない。

「この形、何かに似ているぞ」

思わず僕は指を鳴らした。――軍艦だった。貨物船よりも物々しい。

子供の頃プラモデルで作った戦艦大和とか、武蔵とかの、あの凸凹したいびつな雄姿である。非常階段が斜めに走っている西側の側面は、ことさらにその印象が強い。幾つもの窓が小さく並び、陰気に曇っているのも、霧の中に聳える怪異な城のようにも見える。

屋上付近には、菱形に突き出した見張り塔めいた部分があり、厳めしい拘置所も連想させた。

周囲に隣接する喫茶店やブティックまで、この建物の影響で陰気に寂れているように思われた。正面左の蔦で蔽われた赤煉瓦の珈琲店には、客などひとりも入っていない。この戦艦のような建物が、陰鬱なオウラでも発しているのかも知れない。

雲が割れて、太陽の光が卵の黄身のようにこぼれ、日差しは強くなっていた。意を決して丹下建設の中に入る。気温とは別な次元で、冷えた重たい気配があった。

丹下建設のエントランスは、正面から見ると堂々としていて、湿気を帯びた観葉植物に囲まれ意外に美しい小庭園を形造っていた。

怖ろしげな外観とは、大違いだ。

彩光性の良い吹き抜けのあるアトリウムには、受付の所まで遊歩道が敷かれ、自然石が趣のある崖を作り、小さな瀧が飛沫を放ちながら細い水を落としていた。昔のイタリア貴族の別荘などに造られたグロッタとかいう人工洞窟ふうの演出だ。ローマの廃墟ふうの背の高い石のアーチが幾つかあって、濃緑の羊歯類が、ぎざぎざの葉を微風に揺らしている。これはいろんなスタイルの折衷様式なのだろうか。コリント式を模したような大理石の列柱の下に、長方形の鏡のような蓮池が水を湛えていた。澄んだ水面には石柱とともに植物や壁までが、明晰な絵画のように映し出されている。

池の水面には、円く張りつめた蓮の葉が緑の皿のように並び、水は底の方から照明で明るく透かされていた。光は高い天井の付近まで、淡い金色に延びてゆらめいていた。外観の恐ろしげな輪郭とは違って、色彩も光も豊富で、心がうきうきするような光景だった。

受付は、石造りのアーチを通り抜けて、植物の繁みの中にあっただ。受付が植物に囲まれているのだ。美人だが青白い表情の受付嬢は、マネキン人形のように背を伸ばしたまま動かない。

少し建物内部の光景に見とれていた僕は、前方へと進んで行った。そして『フリーライター 羽木務』という名刺を差し出すと、どこか北欧系美人を思わせる受付嬢は、ひどく驚いたような顔をした。紺色の魅力のない制服を着せられて、何だか気の毒だ。僕から見ても洗練されたデザインとは言えず、何やら共産圏の人民服のようにも見える。

受付嬢はすぐに会長室と連絡を取ってくれたが、しだいに顔を曇らせ口籠った。片耳を押さえ俯いた格好になって、妙におどおどしながら話している。

「あの、申し訳ありませんが、取材の予定は、昨日だったということなんですけど」

受付嬢は大きな眼を見開き、瞬きながら言った。

「昨日、ですか？」

「いま会長本人が電話に出ているのですが、スケジュール通りに、なぜ来なかったのかと申しております……」

「おかしいな。僕が聞いているのは九日。つまり本日の十時ということでしたけど」

スウェーデンかノルウェーの女子大生のような受付嬢は、もう一度受話器を耳にした。片耳を押さえ、電話に何度も謝りながら、ひどくうろたえていた。むろん、電話の向こうで怒鳴っている会長に対して、頭を下げて謝っているのだ。その度に、髪が揺れるのがちょっと可愛い。

「何か、手違いがあったようで」と受付嬢。

「僕が直接話しましょうか」

「いえ、とんでもない」

受付嬢の体は、ほとんど慄えていた。とんでもない……。

(ちっ、また色川さんのミスだ。説教ばかりしてるくせに、いいかげんなんだから。この前は時間を一時間も間違えて教えてくれたし、今日は、日にちまで)

受付嬢は、なおも電話の向こうの相手に、眉を寄せて必死で謝っていた。

僕は白けてしまい、溜息をついて、ガラス張りの高い天井で覆われた明るいアトリウムを見渡した。悪いのは、十中八九、色川良雄だ。しかし僕にとって彼は、一種の兄貴分であり、仕事の直接の発注主だから、仕方がない。

自然光が大量に射し込み、光線の交錯する淡い模様が美しい。緑が多いのはいいが、これではまるで亜熱帯の密林だ。

壁には、アジアの子供たちに囲まれて一人の老人が立っている大きな写真が掛けられていた。子供達の無邪気な黒い瞳と、黄色い鬼瓦が笑ったような顔のコントラスト。これが丹下喜作という老人なのだろうか。なるほど悪辣そうな顔である。

この企業もODA関係で、東南アジアの国々でダムでも造っているのだろうか。

コリント式の列柱の奥にも、丹下会長らしき痩せた老人の銅像が立てられていた。金日成の記念像のように、片腕の指を斜めに突き出し、未来の発展か何かを暗示している。いま、うっかり北朝鮮の指導者の名を思い浮かべたが、さっきの異様な緊迫感を考えると、案外これは当たっているのかも知れない。

片腕は背中の方に折っているが、そちらに廻ってよく見ると、袖のところが平べったくなっている。片腕であることを知らない人は、気がつかないだろう。彫刻家も、なかなか苦労しているようだ。しかし僕は何となく、サンチョ・パンサ抜ききのドン・キホーテの像も連想した。ご立派な大理石の柱も、蓮池も、色鮮やかな植物の演出も、つまりはこの銅像を演出する装飾品に過ぎなかったわけだ。

陰鬱に耀く彫像は、蓮池に鮮やかに映り込んでいた。

観葉植物の繁みの中に、何か黒く光るものが見えた。

――監視カメラだ。

あたりをもう一度、子細に見廻して見ると、樹木のあちこちに小さな銀色の箱から突き出た黒い円筒状のレンズが、こちらを正確に伺っている。

「分かりました。申し訳ございません。とにかく会長が、大事なスケジュールを割いて、会うと言っております。十階の奥の小会議室まで、お願いいたします」

電話での上司への長い長い弁解のあとで、受付嬢が困惑しきったように僕に言った。彼女のすまなそうな表情を見て、どうやら「大事なスケジュールを割いて」という言葉は、上司にそう言えと強制されているのだろうと思った。

電話が終わったあと一瞬見せた虚脱した目を見て、僕はいささか可哀想になった。

(続く)

建築家の檻 2

<http://p.booklog.jp/book/97692>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97692>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97692>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ